

第2章

雑木林ぞうきはやしのなかで



つぎの朝、目をさました井上さんは横になったまま、しばらく薄暗い室内へ視線をたたよわせていた。自分の寝ている場所が、前の日に引越してきたアパートだと気づくまでには、だいぶ時間がかかった。

戸外からの音は、まったく聞こえない。風は、とつくにやんだらしい。

枕元に置いた腕時計を見ると、七時を少しすぎていた。慣れない部屋にしては、よく眠ったものだ。引越越して疲れたせいだろう。

隣の布団では、奥さんも熟睡しているようだ。きつと昨夜は遅くまで起きていたのだろう。井上さんは静かに上半身を起こした。たちまち冷気が背筋を襲ってきた。

毛布で肩をおおって立ち上がり、そっと板戸を開けてダイニングキッチンへ忍び出た。テーブルの上に細い光がのびていた。雨戸のすきまから朝の陽光がさし込んでいた。

まぶしさに目をしばたたきながら、すきまから戸外を覗いた。そこは緑に満ちていた。なんだろう。井上さんはガラス戸を開けて雨戸のストッパーをはずした。音のしないよう

にと、少しだけ右へ引いてみた。アルミ製の雨戸は思いがけず賑やかな音をたてた。

けたたましい鳥の声とともに、朝の光が待ち構えていたように飛び込んできた。

井上さんは小さく口をひらいて立ちつくした。目の前に緑色にかがやく林が広がっていた。たくさんのお木々がひしめき合うように立ちならび、東からの斜光を浴びているのだ。

それぞれに繁茂する葉は、初冬にもかかわらず濃い緑をたたえていた。

井上さんは額に片手をかざし、陽光を避けて見直した。すると、木々は逆光のなかで黒い幹をあらわにした。大人の腕で一抱えもありそうなもの、子どもの脚ほどのもの、立っているのもやつとというぐらい細いものなど、さまざまである。

いずれもまっすぐなものはなく、まるで踊つてでもいるように、くねったり曲がったり、空へ向かつて背伸びしたり、あるいは地にひれ伏さんばかりだったりしている。

さらに遠くへ視線を向けると、そこには竹の群れが押し寄せていた。ゆうに百本を超す竹が、てんでに葉を密生させ、ゆるやかなカーブを描きながら、わずかな風に揺すられている。それらが林の緑の深さを加えているのだった。

井上さんは冷たさを忘れて立ちつくしていたが、ようやく木々の手前に目を転じた。

雑木林は、ペランダの三メートルばかり先まで迫ってきて、白い金網のフェンスによってかろうじて押し止められていた。ペランダとフェンスのあいだは地面が露出し、フェンスに沿って背の低い山茶花の株がおよそ二メートルおきにならんでいる。

繁った葉のあいだから、いくつか赤い花が覗いていた。

井上さんは深い吐息をついてから、隣の部屋へ声をかけた。

「おおい、起きてしろよ」

布団が動いて、奥さんの身じろぎするのがわかった。

おそらく空気の冷たさに、たじろいでいるのかもしれない。前の家では、目覚める前からエアコンが自動的に家じゅうを快適な温度にしてくれた。

「すごいぞ。……すぐそこまで雑木林が迫ってきてるんだ」

井上さんは、ことさら陽気に告げた。

まるで大発見でもしたような、ふだんはない、はしゃいだ声だった。

つられたように奥さんが起きてきた。井上さんと同じように、全身を毛布でくるんでいる。まぶしそうな顔つきで近づいてくると、そのまま夫とならんで立ちつくした。

「どうだい、すばらしいだろ。……山の家にもきたみたいだな」

そう言いながら、ふと懐かしい気持ちになった。

——山の家といえば、木曾の家をずいぶん長いあいだ忘れてたなあ。

木曾の檜川村にある家には、二十年以上も前に訪れたきりだった。

——おやじが死んでから、もうそんなになるんだなあ。

井上さんは戸惑いをおぼえた。まったく思いもかけないときに、古い記憶がよみがえってきたものだ。ふたたび林へ目を移しながら、ひそかに苦笑した。

「おお、寒い。風邪を引きそつたわ」

奥さんが肩を震わせながらつぶやいた。

「ずいぶん寒々とした林だ。……あら、あんなところに柿がなってる」

「えつ、柿が？ どこだね？」

井上さんが目を細めると、奥さんが右手を上げて指さした。

さつきは竹の群れの多さに驚いて見落としたのだろうか、意外にも林の中ほどに丈高い柿の木がそびえていた。葉を落として裸になった枝が、まるで天空をかき回してでもいるように、縦横に入り組んでいる。それぞれの枝には赤黄色に染まった実がたくさんついていて、大ぶりの鳥の影が一つ、せつせとついばんでいるようだった。

「……あれはヒヨドリね」

と、奥さんのつぶやくのが聞こえた。

横顔を見ると、ほのかに笑っていた。陽光をまともに受けた化粧気のない頬に、幼女のような柔らかな産毛が浮かびあがっている。

「さつきの鳴き声は、あいつだったんだな」

井上さんは雨戸を開けたときの、鋭い鳥の声を思いだした。あれは、とつぜんの人間の姿に驚いた声だったのか。せっかくの朝食を邪魔された怒りの声だったのだろうか。

アパートのほかの住人たちは、まだ雨戸を開けていないようだ。しんとした建物のなかで井上さん夫妻だけが、毛布にくるまって林を眺めている。

「この雑木林は土地の持ち主から見放されたんだな」

と、井上さんが言った。

「こんなに荒れてしまったのは長いあいだ手入れをしていないからだ。ほら、あの竹の群れの勢いのよさを見てごらん。いまに、この林は竹に浸食されてしまっだろう」

奥さんはなんの反応も見せずに、やがて林から目をそらして背中を向けると、まっすぐヒーターの前へ行き、腕をのばして点火した。

すぐに鼻の奥を刺激する、いやな臭いがただよいだした。

奥さんは寢床のそばで、そそくさと着替えてから、台所仕事をはじめた。

井上さんは雨戸をすべて開け放った。部屋じゅうに光が満ちわたった。日ざしの向こうの柿の木を振り返ってみると、さっきのヒヨドリはいなくなっていた。

ガラス戸を開めてから、井上さんは壁際のソファに腰を落とした。ガラス戸の上半分は透明なガラスだ。そこから陽光がさし込んでいる。こころなしか光線に緑色がまじっているようにも思える。

足元に敷いてある二組の夜具から細かな埃が立ちのぼっていた。それが光線のなかで、生き物のように浮遊し、光を反射しながらうごめいている。

つい前日の朝までベッドに寝ていたせいかな、すぐには布団をたたむ気になれなかった。

——いま、たたんだら、将来にわたってやらなきゃならんことになってしまっだろう。

いつのまにか、そんなことを真面目に考えている。べつに、いやな仕事でもないが、なんとなく沽券にかかわるといふ気もしないではない。

井上さんは、ソファの背によりかかって、ほんやり雑木林を眺めることにした。

こうして気分を落ち着かせてみると、ひさしぶりの解放感がじんわりと寄せてくる。なにしろ、なにもすることがないのだ。これまでは起きてすぐから会社のことを考えたり、金策のために気をもんだりしていたのに、その必要もなくなってしまった。

目をうつろにして温かい陽光を浴びていると、光芒のなかに浮かんできくものがある。それがなにか、つとめて見きわめようとするでもなく、ただ正体がはつきりするのを待っている。すべてを自然にゆだねきつて、赤ん坊のように視線を宙へ泳がせる。

やがて光のなから影があらわれ、懐かしい微笑みが近づいてくる。人の形がととのつてはいないが、たしかに人間だとわかる。だれともわからないが、なんとなく親しい人だと思える。もしかしたら、おふくろかな。とつくのむかし、井上さんが中学生だったころに亡くなった母親のような気もする。

味噌汁の匂いがただよってきている。毎朝、欠かしたことのない好物だが、幼いころに味わった母親の味噌汁が、いまでも忘れられない。飽きもせず、ワカメと豆腐だけの具にこだわるのも、そのせいにちがいない。

「さあ、ご飯にしましょ」

ふいに奥さんの声がした。

「その前に、布団をたたみますから、ちょっとどいてくださいな」

井上さんは光のなからダイニングキッチンへと追いつて立てられた。よろめきながら部屋

を出ると、すぐ後ろで間仕切りの板戸が音をたてて閉ざされた。

朝食のおかずは、いつもどおりの味噌汁と漬け物と魚の干物だった。

材料は引越し前に買いととのえておいたのだろう。ふだんから朝食は同じメニューだから、トーストと目玉焼きとカリカリに焼いたベーコン、あるいはシリアルにミルクをかけるだけ、と決めている人たちと変わらない。

食事をすませて、いつもどおりに番茶を飲んだあと、井上さんはソファへ戻った。

雑木林からの光は、いつのまにかだいたいお後退していて、部屋半分までしか照らしていなかった。しかし、まだかがやきは弱まっておらず、むしろ温かさが増していた。

——今日は一日じゅう、こうしていようかな。

井上さんは手足をのばし、大きなあくびをした。それだけで目に涙がにじんできた。

すっかり忘れていたが、子どものころは、あくびと涙と一緒に出るのはあたりまえだった。もう、どのくらい長いあいだ経験していなかったことだろう。

井上さんはダイニングキッチンに残っている奥さんへ声をかけた。

「なあ、きみも、ここにきてごらん。少しは、のんびりしようよ」

しかし、奥さんはテーブルの向こうで、両手に包んだ茶碗を口元へ運びながら、あらら、と苦笑まじりに言った。

「ずいぶん気持ちが悪いですこと、まるで子どもみたい」

「そうとも。……すつからかんになって、心身ともにさっぱりしたんでね」

「重たい荷物を肩から下ろしたような気持ちなのね」

「まあ、そういうところかな。……そのかわり、なにもなくなつたがね」

井上さんが自嘲きみに笑つてみせると、奥さんはお茶を飲み干してから、あらためて氣づかうような目を向けてきた。

「老け込まないでくださいよ、あなた」

「きみだつて、ボケないでくれよな」

昨日から不安だつたことを、つい口にしてしまった。

昨夜、奥さんのようすから、その兆しを感じたのは確かだつた。しかし、今朝になつてみると、よけいな心配だつたようだ。思つたよりは、しっかりしている。

井上さんは奥さんへ笑いかけ、またガラス戸の外へ目をやった。

あの柿の木が見えた。梢に強い陽光があたつて、そのあたりの実だけが朱色にかがやいていた。荒れた雑木の林のなかに、ぽつんと立っている柿の木は、もとはそこに植えられたのにちがいない。いまは、だれも実を採りにこないようだ。

——きつと雑木林と一緒に見捨てられたんだな。

とつぜん、せつない気分が襲つてきた。自分と似ているな、と思つたからだ。

——井上木工所も、わたしも、世の中から見捨てられてしまったわけだ。

これだから、ほんやりするにかぎる、と井上さんは胸のなかでつぶやいた。よけいなも

のを見つめたりすると、つまらないことを考えてしまふ。

ソファに背中をうずめて、つとめて目をうつろにする。頭のなかが空っぽになり、自分のすべてが宙に浮いたような感じがする。それが、いちばん楽しいか。

それから一時間ほど、井上さんはソファでほんやりしていた。もしかすると、眠ってしまったのかもしれない。自分でも気づかないうちに。

遠くで犬の吠える声があった。なんとなく聞きおぼえのある声だった。

「あなた、あなた。真也くんが、チビと……」

奥さんの言葉をすべて聞く前に、井上さんはソファから腰を上げた。

玄関ドアのあいだから、チビがこつちを見つめていた。嬉しそうに大きな身体を揺らし、いきなりウォオンと太い声を出した。ふだんはめったに吠えないのに、よほど訴えたことがあるようだ。

チビの背後で真也が懸命に引き綱を引っ張っているらしい。少しでもゆるめたら、チビは部屋のなかへ飛び込んできそうだった。だめだよ、チビったら、とたしなめる声がある。

「チビ、おやめなさい」

奥さんがするどい声を張り上げると、チビは恐れをなしたように少し静まった。

「ここは、おまえが入ってきてはいけないの」

このアパートには、ペットを飼ってはいけないというきまりがある。引っ越し前に、洋子がそう告げた。それもあって、チビを預けることになったのだ。

叱られたチビは、けげんそうに奥さんを見上げていた。どうして入っちゃだめなのかな、と聞きたがつているみたいだった。

「やあ、チビ、元氣そうだな」

井上さんがそばに行つて頭を撫でやると、飛び上がるようにして立ち上がった。大柄な身体ですり寄ってくるのを、抱きとめながら、ドアの外にいる真也をみとめた。

「よくきたね。だが、チビが入れないことをママから聞かなかったかい？」

「うん。……ママには内緒できちゃったんだ」

真也は面目なさそうに答えたが、すぐに目をかがやかせた。

「でも、チビつてすごいんだよ。その道路まできたら、もうリリーとエーバがいるつてわかったみたいなんだ。このアパートへ、まっすぐ走ってきたんだもの」

アパートの窓に向かつて、いきなり吠えはじめたという。それで、だいたいの場所しか知らなかった真也にも、この部屋だとわかったのだそうだ。

「二度もきたことがないのにねえ、おまえ、お利口さんなんだねえ」

と、奥さんが涙声になつて、横あいからチビの背中を両手でさすった。

抱きかかえられたまま、チビは鼻面を上げて、井上さんの顎をなめはじめた。

「しよがないな。じゃあ、散歩にでも出るとするか」

井上さんはチビから離れて、奥の部屋へとつてかえした。壁にかけておいたコートをはおり、マフラーをくびに巻きながら、いそいそと戻ってきた。

「さあ、行こうか、真也くん」

「うん。じゃあ、エーバ、またね」

真也がチビの引き綱を引きながら、あいているほうの手を振ると、

「まあ、せっかくなのに、もう行っちゃうの？」

と、奥さんはがっかりしたようだった。

井上さんが靴をはきながら、「冗談めかして言った。」

「どうだね、一緒に散歩してみないか？」

「とんでもない。……わたしは、あなたみたいに暇じゃないんです」

奥さんは腕まくりしながら、狭いキッチンを見まわした。

「さあさ、お洗濯でもしようかしら」

井上さんは真也とチビのあとを追って、あわただしく玄関を出た。

思ったより外気は冷たく、吐息が白かった。

表の道路際で待っていた真也が嬉しそうに声をかけてきた。

「どっちへ行くの？」

「裏の雑木林のなかを見てみたいんだ。ちょっと付き合ってくれんかね」

「いいよ。……じゃあ、こっちへ行こう」

突っ走ろうとするチビをとどめながら、左手へ歩きだした。井上さんは、ゆっくりついていった。すぐに雑木林のそばへきた。道路から見ると、林は人間の立ち入りを拒むよう

に荒々しく立ちはだかっていた。密生した細い木々が自然のつくった柵のようだった。

ところどころに隙間もあったが、そこには大きな物体が転がっていた。汚れきった布団、壊れた冷蔵庫やクーラー、いくつもの裂けたタイヤ、もとの形をとどめていない家具類などが捨てられている。道路に近いので、クルマで運んできて投棄したのだろう。

「これは、ひどいな」

同じような不法投棄の場所がいくつもあった。そのために林がみずから嚴重なバリケードをつくっているようにさえ思えた。もしも人間たちの侵入を許したら、この林じゅうが投棄物だらけになってしまうにちがいない。

「真也くん、林のなかに入るのはあきらめたよ。……ママが言っただけの水のある公園というのは、どこにあるんだね？」

「すぐそこ。じゃ、そっちへ行ってみようか」

二人はチビを先頭にして、いまきた道を戻った。まもなく道路の反対側に公園の入り口があった。入り口といっても、目立たない低い棒杭がならんでいるだけだった。棒杭には大人の親指ほどの太さのロープが通っており、それに従つていくと、自然に公園のなかへ導かれるようになっていた。

公園内の小道は、ゆるやかな下り坂だった。道の両脇には、たくさんの木々がそびえていて、上空から木の葉が音もなく舞い落ちていく。降り積んだ枯れ葉が幾重にも地面をおおっていて、歩くたびに踏みしだかれる枯れ葉が乾いた音をたてた。

二十歩ばかり進むと、その先は木々がまばらになった広い空間だった。およそ五十平方メートルの平らな土地が落ち葉でおおわれている。木々の枝のあいだから陽光がさし込んで、あちこちに日溜まりをつくっていた。

公園内には、井上さんたちのほかはだれもいなかった。

真也が腰をかがめて、チビの首輪から引き綱をはずした。チビは期待に満ちた表情で見上げていたが、解放されると同時に走りだした。

枯れ葉を蹴散らして駆けまわり、ふいに立ち止まって、こちらをうかがい、また飛びはねるように走りだす。いきなり地面に転がって仰向けになり、枯れ葉をはねあげながら、四つの脚で空を蹴っていたかと思うと、ふたたび走りはじめた。

「年寄りのくせに、元気のいいやつだな」

井上さんが呆れたように笑うと、隣で真也が遠慮がちに聞いてきた。

「ねえ、リーリ。……どうして、あのアパートにいるの？」

「どうしてって、あそこに住むことになったんだよ」

「前の家は？」

「手放したんだ」

「それって、どういうことなの？」

「住むのをやめたのさ。で、ほかの人に明け渡したんだ」

「じゃあ、もうあの家には帰らないの？」

「ああ、ほかの人が住むか、あるいは壊されて、新しい建物ができるかどうか」

「……ふうん」

真也は納得できないらしく、不審そうに見上げてきた。

井上さんが見返して、黙ったまま真也の肩を叩いた。そんなこと気にするなよ、という思いを込めていたのだが、真也に伝わったかどうか。

「アパートじゃペットは飼えないんでね。きみにチビを頼むことにしたんだよ」

「それは嬉しいんだけどさ。なんか、よくわかんないんだな」

「そうか。じゃあ、話しておこう。……きみも会社にきたことあるよな。あの木工所がつぶれたのさ。井上木工所はなくなっちゃったんだよ」

「……なくなっちゃったの？」

「真也はびっくりしたように見上げてきた。

「じゃ、もうテーブルや椅子や戸棚をつくるのも、やめたの？」

「そういうことだよ、残念だけどね」

また哀しみが押し寄せてきたので、井上さんはそこへしゃがんで、チビを呼んだ。勢いよく走ってきたチビが、二人の前で仰向けに寝そべった。その腹を撫でてやりながら、

「しばらくは、こうして、のんびりすることにしよう」

井上さんは、つとめて陽気そうに言った。

しばらく黙り込んでいた真也が、井上さんのそばにしゃがんで、

「チビのことは、まかせといて」

と、気づかうような口ぶりで告げた。

「ぼく、チビと一緒にいられて、とっても嬉しいんだ」

「そうか、よろしく頼むよ」

「ねえ、リリー。……ときどききてもいい？」

「いいとも。しかし、サッカーはどうするんだね？」

「ちゃんと練習してるよ。サボったりはしないさ」

と、真也は真顔で答えた。

「それに、もうすぐ冬休みになるから」

井上さんはチビの腹を軽く叩いてから立ち上がった。すぐにチビもはね起きて、また枯

れ葉を巻き上げながら走りだしたが、

「おおい、チビ、おいで」

真也が引き綱を差して呼ぶと、しぶしぶながらというように戻ってきた。

「さあ、もう帰らないと、ママに叱られちゃうぞ」

「なあ、真也くん、このつぎはエーバを散歩に連れだしてくれんか」

「いいよ。エーバにも、ここらを案内してあげる」

「頼むよ、家のなかにはかりいると、運動不足になるからな」

二人は歩きだし、公園の奥にある小さな流れの手前まで来た。小川にかかる木橋を渡る

と道路になつてゐる。それをたどつて、真也は家へ帰るのだそうだ。

「この上流に湧き水があるんだよ。ほら、向こうに滝が見えるでしょ」

と、別れ際に教えてくれた。

井上さんは橋の上で立ち止まり、岸辺の木々をすかして上流を眺めた。

十メートルほど先に白いきらめきが見えた。そこが真也の言つた滝だろうか。五十センチたらずの高さだから、むしろ小川の段差というべきかもしれない。

目を上げると、思いがけなく上流の彼方で巨大なものがこちらを見下ろしていた。コンクリート造りの円筒形をした建造物が、木々の梢より高くそびえ立っている。

——あれは、なんだろう。

たずねてみようと振り向いたら、真也とチビの姿は見えなくなっていた。

玄関のドアを開けると、かすかな歌声が聞こえてきた。

靴を脱ぎながら、ただいまと言つたが、返事はなかった。うたっているのは奥さんらしい。しかし、それにしても幼い声だった。

不審に思つて奥の部屋を覗いてみた。やはり奥さんがソファのそばに座つて、鼻歌をうたっていた。畳の上にアルバムをひろげ、ゆつくりページをめくっている。

「……ゆめじにたどるは、さとのいへし」

懐かしいメロディーだった。だいたい前に、何度も聴いたことがある。井上さん自身もう

たったかもしれない。ふと、結婚して間もない日々を思い浮かべた。

およそ四十年前、六畳と三畳に小さな台所のついたアパートで、二人は新婚生活をはじめた。井上さんが二十八歳、奥さんは二十五歳だった。そのころ、井上さんは父親の営む小さな工場で働いていた。

一日の仕事を終えて帰宅すると、奥さんは半畳ほどの台所で、若い夫のために夕食をつくっていた。部屋の入り口に立ち、木製のドアをノックする前に、いつも井上さんは微笑みを浮かべた。部屋のなかから美味しそうな匂いとともに、楽しい歌声が聞こえてきたのだ。高校時代にコーラス部員だった奥さんは声が美しく、音程もしっかりしていた。

歌声を聴くたびに、井上さんは頬のゆるむのをおぼえた。一日の疲れが、身体じゅうから溶け落ちていくような気がしたものだ。つた。

「……まどうつあらしに、ゆめもやぶれ」

井上さんが帰ってきたのも気づかないのか、奥さんはうたいつづけていた。

歌に合わせて上半身を揺らしながら、アルバムに見入っている。ページをめくるたび、ほんの一拍だけ間をあげ、すぐまた元に戻った。歌は際限なくつづきそうだった。

昨夜もそうだったが、どうもいつもの奥さんとちがっている。

その丸めた背中を見守っているうちに、井上さんは落ち着かなくなってきた、

「おい、帰ったよ」

と、和らげた声で呼びかけた。

ゆつくりと顔をめぐらせた奥さんが、黙ったまま見上げてきた。思いがけず、若やいだ笑みを浮かべていた。井上さんが眉根を寄せて見返すと、

「懐かしい写真がいっぱいあるわよ」

と、楽しそうに言った。

「結婚したばかりのころの、あのアパートで撮ったのなんかも」

「……そうかね」

「アルバムに貼ったきりで、あんまり見たことなかったのね」

「暇がなかったせいじゃないか。……子育てとか、学校とか、いろいろあったから」

「そうよね。こんなに時間をもてあますようなことってなかったもの」

「いままでは忙しすぎたんだな」

「ええ、振り返る余裕がなかったっていうか、そうすることさえ忘れてたみたい。なにもかも、ただ後ろに残してきただけ。チビの泥んこ脚の跡みたいに」

「そういうことだ」

「でも、ここに引越してきたおかげで、いろんなことを思いだしたわ。だって、この狭い部屋に座つてると、あの当時に戻っちゃったみたいなのがするんですもの」

奥さんは、ひとりでうなずきながら言った。

「あのころと一緒よね。……そうだわ、この狭い部屋で、イチから出直すの」

「なにを言ってるんだね。あの当時と同じにやできないさ」

若いころと一緒にされてはかなわない、と井上さんは苦笑した。

「あれから四十年もたってるんだ。……そんな体力や気力は残っちゃいないよ」

奥さんは笑みを浮かべたまま、首を少しかしげて夫を見つめていた。

井上さんはテーブルに向かって腰かけた。前の家から運び込んだ大きなテーブルと椅子は、井上さん自身が三十歳のときにつくったものである。

父親の工房で、ようやく一通りの修業を終えて、先輩の職人たちと同様に家具づくりをまかされるようになったところだった。

前々から考えていたデザインを試したくて、仕事の合間を縫って初めて自主的に製作したダイニングセットである。仕上がったものを見てもらうと、

「売りものにやならねえな」

父親は、ぼつんとつぶやいただけだった。

けっきょく材料費を自分持ちで、わが家用のダイニングセットをつくったことになる。

奥さんは素直に喜んでくれたが、ほんとうのところはわからない。少ない給料のなかから材料費を捻出したのに、実際は狭いアパートへ運び込むこともならず、長いあいだ工房の材木置き場に預かってもらうほかなかったからだ。

実際に使えるようになったのは、それから六年もたって公団住宅に入居してからだ。

——あのころ、おやじは六十代で、まだ元気だった。

材木業を営んでいた生家から離れ、十二歳で木工の世界に飛び込んだという父親は根っ

からの職人だった。修業時代に教わった親方が父親の素質を見込んでか、ことにも厳しく仕込んでくれたらしい。仕事ぶりは極めていいねいで、材料の吟味から製品の仕上がりまで、自分の納得がいけないものは見逃さなかった。弟子たちがつくったものの寸法が毛すじほどもまちがっていたら、容赦なくつくり直しを命じた。

だから、なかなか職人が居つかず、受注した仕事も遅れがちだった。

——おやじは、けっして妥協しなかった。それはえらいと思うがね。

当時は昭和三十年代が終わったところで、父親の修業した時代とは、日本じゅうの人びとの考え方や暮らし方など、すべてについて変わってしまった。

——そのことに、おやじは気づかなかった。いや、もともと気にもしなかった。

職人は、労働者の意識を持ちはじめた。国じゅうに公団住宅が建ちはじめると、和家具は洋家具にとって代われ、団地サイズと呼ばれるユニットタイプが推奨された。

——あげくに息子から背中を向けられるとは、思ってもいかなかったはずだ。

井上さんは深い吐息をついて、自分のつくったテーブルの上に目を落とした。

ひとりごと



心配だよ

リーリとエーバに会いに行ったことが、その日のうちにバレしてしまった。
なぜかっという、ぼく自身ががまんできなくて、

「ねえ、どうしてリーリの会社、なくなってしまったの？」
と、夕食のとき、ママに聞いたからだ。

ママは恐い顔をして、約束を破ったわね、とぼくをにらんだ。
でも、すぐに目が笑ったので、ほっとした。

「ねえねえ、リーリの会社、なくなっちゃったの？」
そばで聞いていた優香が声をはりあげた。

とつぜんテーブルの下から、のっそりとチビが出てきた。尻尾を後ろ脚のあいだに
はさんでるところを見ると、優香の声に怯えたらしい。

「いいんだよ、チビ、恐がらなくても」

ぼくが呼びかけると、おそろおそろ振り向いた。なんだか哀しそうな表情だった。

もしかしたらちびも、リーリのことを心配しているのかもしれない。

「それはね、リーリの会社でつくってた家具が急に売れなくなったからなの」とママが考えるようすをしながら言った。

「とっても使いやすい、いい家具なんだけど。売ってたお店のついでダメになっちゃったらしいの。それで、会社をつづけていくことができなくなったわけ」

「じゃあ、リーリはどうしたらいいの？」

ぼくは、ますます心配になってきた。お仕事をつづけられなくなったら、リーリは困るだろう。あんなにたくさんさんのテーブルや椅子や戸棚をつくったのに、もうダメなんて、きつとリーリは泣きたい気分なんだろうな。

「いままで、いっぱい働いてきたんだから、ちょっとお休みしたほうがいいって、ママは言ってるの。エーバと二人で、のんびり暮らすのもいいんじゃない？」

そうママは言ったけど、どことなく淋しそうな感じがした。ほんとに、そんなの好きなことじゃないんだな、とぼくは思った。きつとママだって心配でたまらないんだ。

「明日も会いに行くんだ。こんどはエーバを散歩に連れて行って約束したんだから」
ぼくは、すかさず言った。このチャンスに自由に遊びに行けるライセンスを獲得し
といたほうがいい。いまなら、ママもうるさいことは言わないはずだ。

「あたしも行くう。あたしだって、エーバに会いたいもん」

「優香はダメだよ、ひとりで帰ってこられないだろ」

「帰ってこれるもん。……いっぺん行ったら、ちゃんと帰れるもん」

「じゃあ、チビを引っ張っていけるか？」

ぼくは優香をからかいながら、そとママの顔をうかがった。

ママはさえない表情で、ぼんやりと宙を見つめていた。やっぱりリーリのことを心配してるんだ。